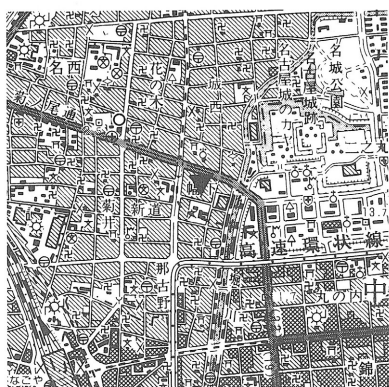


愛知・貞養院遺跡
ていよういん

- 1 所在地 愛知県名古屋市区幅下一丁目
- 2 調査期間 二〇〇一年(平13)一月～三月
- 3 発掘機関 名古屋市教育委員会・名古屋市見晴台考古資料館
- 4 調査担当者 水野裕之
- 5 遺跡の種類 近世城下町跡
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

貞養院遺跡は、台地上の名古屋城三之丸の西側にあたり、堀川を挟んだ沖積低地に立地している。名古屋城下町遺構が主体の遺跡で、



(名古屋北部)

当時は武家地と町地となっていたところである。遺跡のすぐ南側には、寛文三年(一六六三)尾張藩主二代光友のときに計画され、江戸時代の上水道であった「巾下水道」の遺構が検出された幅下遺跡が隣接している。

今回の調査区は、城下絵図や明治時代の地籍図などから、名古屋城下町の町人地にあたる地点と推定できる。発掘調査の結果、屋敷地境と思われる石垣、建物基礎の木杭や廃棄土坑などのほか、埋設された竹樋と継手による水道遺構も検出された。多数検出された廃棄土坑からは、一七世紀から一九世紀の陶磁器類とともに、下駄・漆器椀、箸、羽子板などの木製品も遺存し、これまで検出例の少なかった名古屋城下町の町人の暮らしを知るうえで、貴重な生活用具の考古資料となっている。

木簡は計七点出土した。いずれも廃棄土坑の遺物である。(1)は一七世紀末から一八世紀の土坑SK一(東西三・六m南北二・〇m前後)から、(2)は一七世紀後半の土坑SK四五(長径一・四m短径一・三mの楕円形)から、(3)~(5)は一七世紀末から一八世紀初頭の土坑SK二二(東西一・八四m南北一・一mの不整長円形)から、(6)(7)は一七世紀後半から一八世紀後半頃の土坑SK二九(東西一・五二m南北一・九四mの楕円形)からそれぞれ出土した。いずれもそれぞれの時期の多量の陶磁器や木製品・木片が相伴している。

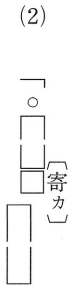
8 木簡の积文・内容

SK一

(1) [納豆]

径72×厚4 061

SK四五



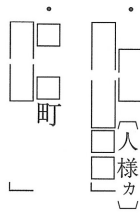
(148) × 29 × 4 019

SK二二



(120) × 32 × 4 019

(4)



(67) × (21) × 3 081

(5)

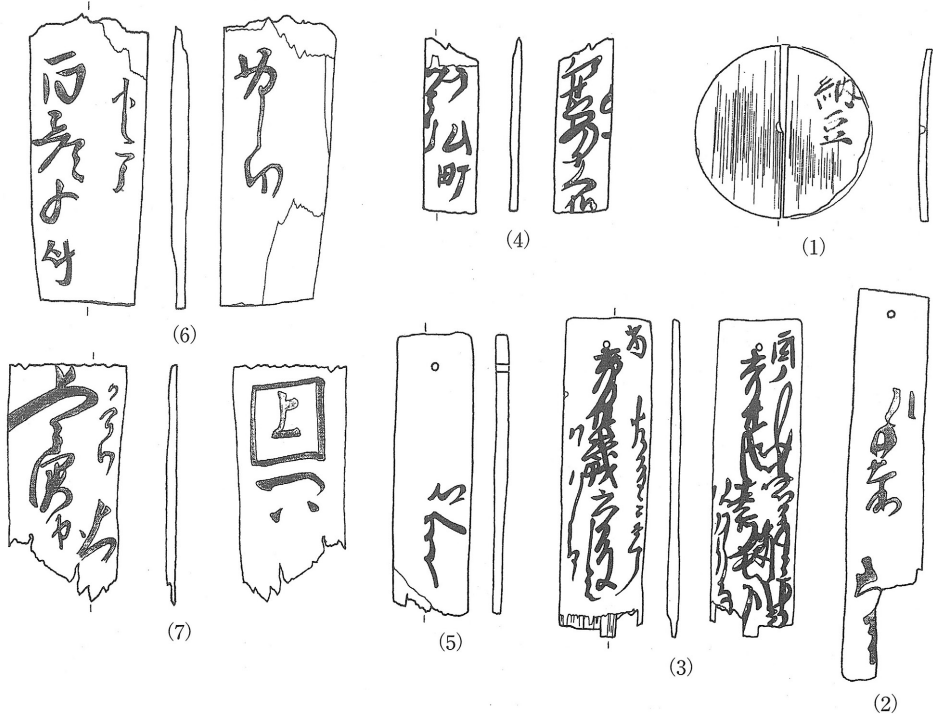


(107) × 29 × 5 019

SK二九



(107) × 42 × 6 019



(7) 正

〔カ買カ〕〔求カ〕
 上々買

(90)×43×4 019

(1)のほかは、付札と思われるが、調査地点が町人の屋敷地であったこと以外、木簡の内容の詳細は現在のところ不明である。(3)は、表裏とも一行目下部は人名、最終行は日付であろう。

なお、釈読にあたっては、名古屋市博物館の岡村弘子氏・山本祐子氏・鳥居和之氏からご教示をいただいた。

9 関係文献

名古屋市教育委員会『貞養院遺跡』(二〇〇一年)

(水野裕之)